

ようだ。収録された名家はゲーテ、シラー、ビュルガー、レッシング、クロプシュトック、クライスト、ヘルダー、シャミッソー、ハイネ、ガイペル、リュッケルト、ウーラントなど多数にのぼる。驚くのは会は大抵盛会だったことだ。例えば、明治27年9月28日に大村仁太郎が一高の講堂で行ったシャミッソーの物語詩「ザラス・イ・ゴメス」の講義は、満堂の聴衆を完全に魅了した。現在では原典によるドイツ詩文の講義に何百人もの聴衆が集まることなど考えられないが、人々のドイツ文学に対する関心が高まっていた明治20年代には、そういうことが起こり得た。ちなみに、豊太は「独逸講文会」を通じて田岡嶺雲、笹川臨風等を知り、のちに俳団筑波会を結ぶに至った。

さて、「ファウスト」を「洒竹庵訳」として『国民之友』第354号（明30. 6. 26）に発表したのは、帝国大学医科大学の学生だった時である。前書きに「悲劇『ファウスト』はゲーテが一生の大作、蘊蓄甚深にして颯興痛快、盡し容易に其義を以て訳し難きものあり。今力めて原作のま、之を直訳す。…夫絶大の文は絶大の筆あつて初めて訳すべし。之なくんば寧ろ訳せざるに若かず。浅学非才の身を以て、大胆にも此業を試む。…」とある。第一部の第一場「夜」（Nacht）の約半分（原詩200行）を訳したものであった。冒頭に、学問に絶望したファウストのあの有名な独白がある場面である。この独白には誇張を感じながらも、確かに真理を含んでいる言葉として共感する人も多いのではあるまいか。

嗚呼、さて我は学びぬ。哲学、法律、医学、
悲しい哉また神学をも。
熱心に力を極めて学びぬ。
しかも依然として吾あり、悲しき暗愚よ、
学びし前と異ならで。
唯執心なる哲学者、執心なる医学者のみ。
はや十年も人に教へき、
上下縦横に――
吾は生徒を欺きつ――
さて見よ、吾等は何事をも識り得ぬぞ。（後略）

洒竹訳には不適切と思われる部分が散見するが、困難な「ファウスト」の日本語訳を初めて試みた功績は否定できない。ただ、1回だけで終わったのは惜まれる。それでも「日本におけるゲーテ文献」が編まれるたびに大野洒竹の名は想起されることだろう。

熊本時代の青木昌吉と『邦語独逸文典』

長年にわたり東京帝国大学文科大学独逸文学科教授を務め、また日本ゲーテ協会の初代会長であった青木昌吉（1872-1939）は、藤代禎補と並んで日本のゲルマニスティクの開拓者である。

その青木は青春の一時期、第五高等学校教授として熊本で過ごしている。熊本での3年間は雌伏時代というべき時期で、まだ後年のような活躍は見られないが、同僚との交友などにより熊本は彼にとって思い出深い地となった。

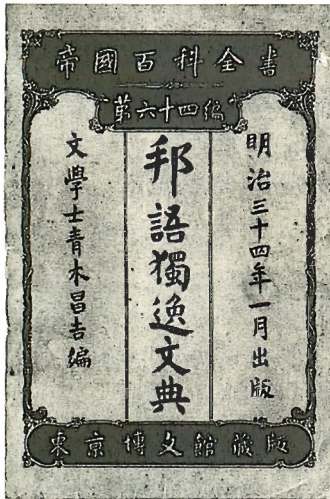
青木は1897年（明治30）7月、登張信一郎（竹風）とともに帝国大学文科大学独逸文学科を卒業した。そして大学院に進み、19世紀ドイツ文学を研究していたが、翌年8月に退学し、五高教授となって赴任した。この熊本行きについて「青木昌吉先生回顧談（四）」（『独逸文学』第1年4輯、昭和13年）において、熊本との縁はかりそめでなかった様な気がすると語っている。つまり学校らしき学校に入ったのは第一高等中学校が最初であったが（彼は小学校に行かず、寺小屋に学び医者になるつもりで私塾で独語を一年半学んだだけであった。）その校長が熊本国権党の領袖古莊嘉門であり、彼は徹底的に軍隊式教育を行った。青木はそこで熊本魂の発露ともいうべき教育を受けた。古莊は第一回の国会が開かれるというので校長を辞め、国に帰ることになったので生徒達は飛鳥山に集まり壮行会を開いた。その時青木は「蘇山の麓白水の辺 今君此の郷に向かって帰る」という詩を吟じた。後任の校長は有名な木下広次で、これまた熊本県人であった。彼はそれまでの軍隊式教育は撤廃し、自治的教育を始めた。こうして青木は6年間の第一高等中学校時代に両様の熊本流の教育を受けたわけだ。



青木昌吉

青木は上記「回顧談」において「当時の熊本の高等学校は中川校長の下に天下の秀才が集まってゐた観があり、私の四十年の教員生活を顧みる時、熊本の高校時代に受けた影響は僅か三年ではあったが、決して少なくはない。当時の教員には夏目漱石、上田整次、児島献吉郎の諸氏があり小島伊佐美君（五高ドイツ語のシンボリック的存在、名誉教授の第1号—筆者注）は私と同時に任官した。理科には田丸卓郎氏とかその他京大教授になられた人も数名あり、卒業したばかりの私はこれ等の人の間に居て多大の裨益を受けた。殊に夏目君からは非常によい感化を受けた」と述べている。そして漱石については、雌伏時代で才能を深く秘めて韜晦していたこと、彼が時々、教師はいやだと言うと部下の教師に「君はその外に喰って行けないではないかと」と冗談にからかわれたこと、自ら進んではやらないが、命ぜられたことは着実にこなす人であったこと、「一寸とみると無愛想で不親切にみえるため、生徒からは寧ろ敬遠さる方であったし、研究の参考書を尋ねてもとりあはず、その人の真面目さが見えなければ決して教へな」かったことなどを証言している。

彼の履歴書（五高記念館蔵）からは明治31年12月に修学旅行のため山鹿地方に出張したことや、33年9月大学予科独語科主任を命ぜられたことが分かる程度だが、「回顧談」によると、漢文の児島献吉郎、語学の夏目、上田、青木の4人で馬車に乗って近辺の山に遊びに行き、山の中の旗亭で酒を飲んだりして大分面白いこともあったようだ。だが漱石がそれについて何も書いていないことに不満げである。最初に教えたのは理科の生徒で、寺田寅彦、木下季吉（ともに後東大理学部教授）がいた。一年次の教科書はコンフォート『ジャーマン・コース』、『エンゲリン第一読本』等を用いた（花田大五郎『五高時代の思ひ出』）。



邦語独逸文典

五高時代の唯一の著作に『邦語独逸文典』がある。該書は博文館の帝国百科全書の第六十四編として、1901年（明治34）1月に出版された。A5版、全226頁。これにはハードカバーの上製と小口マール装の並製があった。「邦語」という言葉は現代の読者にはいささか違和感を与えるかもしれないが、明治期にはドイツ文法は原書を用いるのが一般的であった。特に学校教育ではそうだった。明治30年頃は『ジャーマン・コース』やオットー『独英会話文典』など英文の教科書が広く用いられていた。青木の本は原書を読むための参考書として編まれたものだった。「独逸文典ノ初歩ヲ修メテ片々ノ知識ヲ有スル者ニ幾分カ系統的ノ知識ヲ与ヘテ以テ原書ノ文典ノ了解ヲ容易ナラシメント本書編纂ノ元来ノ目的ナリ…」（凡例）。だが、原書

を読む暇がなく直ちに専門の学術書を読もうとする人のことも多少配慮して編纂したため「時ニ理論ニ走り時ニ実用ニ偏キ首尾一統ヲ欠」いたことを青木自身認めている。全体は8章から成る。第1章「詞ノ品詞」に始まり、名詞・代名詞・数詞・形容詞・動詞・前置詞・副詞の順に論述している。特に動詞と前置詞に多くの頁を割いている。前置詞については本文を補うために巻末において用例を多数挙げて再説している。全体として説明は簡潔に、用例は豊富にという編纂方針が採られているようだ。これは、前記の英文の文典やそれ以前に広く用いられた『シェーフェル独逸文典』に倣ったものであろう。

青木は1901年（明治34）8月23日付で仙台の二高教授に転じた。そして翌年3月今度は『邦語独逸文章論』（博文館）を上梓した。A5版、全268頁。「凡例」に明治34年11月の日付があり、分量の多さを考えると大部分は熊本で書いたのではあるまいか。文典は詞論と文章論から成るべきだと考える編者にとって（英文・独文の原書においてはそれが普通だった。）詞論である前著だけでは不十分だった。なお、青木は接続詞はその性質上、文章論において扱うのが適当だとし、本書の中程でその意義・用法を詳述した。

若き日の湯原元一とテオドール・ケルナー論

湯原元一は履歴書（文部省所蔵）によると、文久3年8月12日肥前国佐賀に生まれた。父は佐賀県士族の湯原繁一。旧名石井袈裟四郎。後年、易水と号したが、これは湯の字を二つに分けたものである。1880年（明治13）11月、東京大学医学部予科に入学した。予科の試験にはドイツ語、漢文、数学の3課目があった。それで湯原元一はドイツ語を学ぶために、当時の医学志望者の多くがそうであったように東京・本郷台町の独逸学校に学んでいる（『独協百年』第4号所収「旧独逸学校出身者会々員名簿」参照）。その甲斐あってか『東京大学医学部一覽』（明治13、14年）を見ると、湯原は「医学四等予科甲生」の組に編入されている。この組には川室圭吾、山田郁治、福島鳳一郎など後年ドイツ語教師になった人の名も見られる。入澤達吉